

～この悲しみを力に、ともに生きる社会を実現します～

平成 28 年 7 月、障がい者支援施設である県立「津久井やまゆり園」において発生した大変痛ましい事件は、障がい者に対する偏見や差別思考から引き起こされたと伝えられ、社会に言いようのない衝撃と不安を与えました。

神奈川県では、このような事件が二度と繰り返されないように、この悲しみを力に、断固とした決意をもって、ともに生きる社会の実現をめざし、ここに「ともに生きる社会かながわ憲章」を平成 28 年 10 月に策定しました。

- 私たちは、あたたかい心をもって、すべての人のいのちを大切にします
- 私たちは、誰もがその人らしく暮らすことのできる地域社会を実現します
- 私たちは、障がい者の社会への参加を妨げるあらゆる壁、いかなる偏見や差別も排除します
- 私たちは、この憲章の実現に向けて、県民総ぐるみで取り組みます

神奈川県では、「ともに生きる社会かながわ」の実現に向けた施策を推進しています。学校においても、より一層「ともに生きる社会かながわ憲章」を広めていただき、障がいや障がい者に対する理解を促進し、誰もが個性を尊重されるとともに、孤立したり、排除されることのないよう、ともに生き、支え合う社会の実現に向けた取組の推進をお願いします。

障がい者に対する理解の促進

障がいのある児童・生徒の人権への配慮が必要であることはもちろん、障がいや障がい者に対する理解を促進することで、障がい者への偏見や誤った思い込みをなくし、ともに生きていくことが求められます。学校は、障がいのあるすべての児童・生徒が、安心して安全に学べる環境でなければなりません。障がいのある児童・生徒の中には、自分の考えや思いをはっきり表現できなかつたり、人権侵害を受けた状態を理解できなかつたりする子どももいます。教職員は、個々の児童・生徒の大切さを改めて強く自覚する必要があります。

さらに、障がい者による講話や、障がい者との交流、体験活動をとおして、障がいについて正しい理解を深めるとともに、児童・生徒が、障がいについての偏見や差別意識をもつことなく、相手の立場から考えようとする態度をみに付けられるようにすることが大切です。

次のページで、全国中学校人権作文コンテストの入賞作品を紹介します。「津久井やまゆり園」の事件を受けて、中学生が書いた作文です。先生方にお読みいただくだけでなく、授業などでご活用いただければと思います。

「誰にも同じ生きる価値」

一年前の七月に、相模原で多くの障がい者の命が奪われた恐ろしい事件が起こりました。この事件の犯人は、「障がい者は、生きている価値がない、親がかわいそうだ。だから安楽死させるべき」という考えのもと、犯行に至りました。

私には、見た目には分かりにくいけれど、知的障害のある妹がいます。あまり多くの言葉を持たない妹だけど、嬉しい時には笑い、悲しい時には涙を流し、くやしい時には怒る、私にとってはごく普通の十二才の女の子です。もし私の妹が、障がいがあるから死んだ方がいい、と言って殺されたら、私たち家族は、悲しみのどん底に落とされ、犯人を一生許せないでしょう。

私と妹の生きる価値に違いはあるのでしょうか？ 以前、妹が通っていた療育センターの園長先生は、自閉症の人たちについてのお話の中で、「人それぞれ血液型が違うように、脳のタイプが違うだけ」と仰っていました。血液型はみんな違います。性格だって全く同じという人はいないでしょう。たったその程度の違いなのに、生きる価値に違いなんてあるはずがありません。たまたま私は健常者として生まれ、妹はたまたま障がい者として生まれて来ただけです。もしかしたら私が障がい者として生まれて来ていたかもしれません。

社会の中には、犯人と同じように、「生産性のない障がい者はいらぬ。」と言う人も多く出てきました。ネット上で匿名で犯人に同調する人が多く出てきて、驚きました。たしかに障がい者はお金を生み出せないかもしれません。でも、何事にも一生懸命に取り組む姿を見て、私はいつも勇気をもらいます。頑張ろうと思います。私は障がい者に生きる価値がないと言う人たちに言いたいです。もしも自分の子供が障がいを持って生まれて来たら、もしも自分の身内がある日突然、事故や病気で障がい者になってしまったら、今と同じ事が言えますか？と。

事件の後、障がい者の人たちはどのような気持ちで生活しているのでしょうか。町を歩いている時、電車に乗っている時、自分の周りにはいる大勢の人たちの中にも、自分の事を「死んでしまえばいいのに」と思っている人がいるかもしれないと思ったら、大変な恐怖なのではないでしょうか。

多くの健常者にとっては、障がい者の人は遠い存在だと思います。私も妹がいなかったら、一生関わりを持たなかったかもしれません。最近では、グループホームという形で地域の中で暮らす障がい者の人たちも増えてきました。でもまだまだ地域の住民に受け入れられないという現実もあります。昔、障害者施設を建てる時、地域の人々が障がい者に会う際には妊婦さんはお腹に鏡を付けて会ったそうです。生まれて来る子供に障がいに移らないようにそうしたそうです。今はそこまでの事はないけれど、よく理解されていない点はたいして変わっていないのかもしれません。

もっともっと、健常者と障がい者の交流が深まれば良いと思います。例えば子供の頃から学校などで障がいを持った友達と遊ぶ機会が全員にあれば、今回の事件の時だってその

子の顔を思い出し、他人事とは思わなかつたらうし、犯人に同調なんかしないで、被害にあった人たちや、そのご家族の悲しみに寄り添えたのではないでしようか。

相模原事件の犯人は、「家族がかわいそうだ」と言いました。確かに普通の子育てより何倍も大変な子育てだらうと思います。私の母も明るくしていますが、妹が小さい頃は、妹の将来に不安を感じてよく泣いていたそうです。今でも、自分たちが死んだ後のことは、いつだって心配だと言います。だからと言って、妹が死んでしまつたら楽になるのでしょうか？まったく違います。悲しみに暮れ、生きる望みを失くすと思います。妹は、家族の癒しであり、世界でたった一人の大切な存在だからです。母は、妹が小さい時から近所の人たちに妹の事を打ち明けてきました。妹を理解してもらい、一人で困っていたら助けてもらえるようにと考えたからです。この世の中は、障がい者にとってはまだまだ生きにくく、妹の人生は私の人生よりもずっとハードな障害物競走のようなものになるだらうと思います。妹は時々、思い出したかのように「お姉ちゃん、大人になったら、一緒に暮らししてくれる？」と聞いてきます。小学生なのに、自分の将来に不安を感じているのです。

私には、この事件を通してより一層強くなつた願いがあります。妹のような障がいを持った人たちが、希望を持って自分の人生を歩いていけますように。私の両親のような、障がいを持った人を育てている人たちが、安心して我が子より先に旅立てますように。そして、私のような人たちが父母亡き後も、障がいのある兄弟を支えていけますように。